

したたかな吸血生物（その1）

一人に付くマダニ

高田 歩

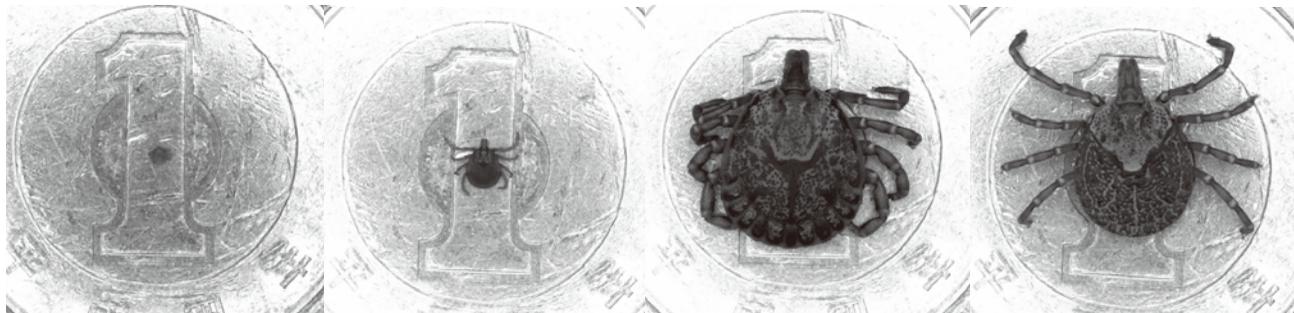


図1 1円玉に乗せたタカサゴキララマダニ（左から、幼虫、若虫、雄成虫、雌成虫）



図2 飽血したタカサゴキララマダニ雌成虫



図3 飽血したタカサゴキララマダニ雌成虫

マダニ（節足動物門 蛛形綱 マダニ目 マダニ科）は、さまざまな動物に取り付き、長期間かけてゆっくりと吸血します。その対象として、人も例外ではありません。日本産のマダニ科は6属43種知られています。このうち、刺症が報告された種を検討してみたところ、4属18種が確認できました。そのほとんどは雌成虫による症例でした。

マダニは、卵から孵化すると、幼虫、若虫、成虫（雄あるいは雌）へと成長し（図1）、各発育期において吸血を行ないます。発育段階を経るごとに体のサイズが大きくなるため、吸血量も増えます。幼虫では数日、雌成虫では1カ月程度かけて吸血する場合があります。吸血時の痛みはほとんど無いと言われ、吸血されていることに気が付き難いようです。このためか、吸血し、大きくなったマダニを見つけ、慌てて皮膚科に駆け込むケースは少なくないようです。

今年度に入り、知人から、体や衣服に付い

ていたマダニを見せていただくことがよくあります。それらを同定したところ、タカサゴキララマダニ（若虫、雄・雌成虫）、キチマダニ（若虫）、フタトゲチマダニ（若虫）、オトゲチマダニ（若虫）、タネガタマダニ（雄成虫）の5種が見られました。このうち、タカサゴキララマダニ、キチマダニ、フタトゲチマダニは刺症報告がとても多く、全発育期の症例が確認されています。特に注目すべきはタカサゴキララマダニで、雌成虫は飽血（満腹の状態）すると、1円玉ほどの大きさになります。図2はイノシシに付いていたものですが、人でも、同程度の大きさになるようです。飽血すると、マダニは自然に離れます。

もし、図3のように、マダニに吸血されていることに気が付いても、無理に引き剥がそうとしないでください。なぜなら、マダニの一部や体液が人の体内に入る可能性があるからです。どうしても気になる場合は、病院へ行くことをお勧めします。